

前漢末三公制の形成と新出漢簡 一前提

王莽代政治史の

著者	山田 勝芳
雑誌名	集刊東洋学
巻	68
ページ	1-17
発行年	1992-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132462

前漢末三公制の形成と新出漢簡

——王莽代政治史の一前提——

山 田 勝 芳

序

前漢末の哀帝元寿二年（前一）五月に大司馬・大司徒・大司空の三公制が最終的に成立し、それが王莽代にも継承された。また後漢初めも同様であったが、光武帝建武二七年（五一）太尉・司徒・司空の三公制に改め、それが以後歴代に継承された。この三公制の成立過程では、成帝綏和元年（前八）の丞相・大司馬と御史大夫を改名した大司空とを三公として以来の歴史的展開がごく簡単に述べられることがあっても、制度的にはあまり問題が無いものとして扱われ、前漢前期以来官職としての三公が無いにもかかわらず、「三公」という言葉が存在することについての思想的問題などの追究が行われる程度であった。また平帝の元始年間のものともみられる四輔（太師・太傅・太保・少傅）・三公・將軍に關係する居延漢簡（後述の五三・一AB）が

あったが、それだけでは十分に考察できないところがあった。ところが、新出敦煌漢簡及び居延漢簡のなかに元始年間の四輔・三公・將軍などの状況を反映するものが発見されており、改めて成帝以降の三公制の形成と、王莽政權確立過程での四輔・三公及び將軍という政權中枢を形成した官職の展開とを具体的に考察する必要が生じてきた。そしてそれによって王莽の権力掌握過程をかなり具体的に考察することも可能になってきた。

このような三公制をめぐる新たな状況に対応して、三公制の展開と平帝元始年間における他の重要官職の展開とを制度史的・政治史的に考察してみたい。

一

さて『漢書』卷一九上、百官公卿表上では、この問題に關係する記述は相國・丞相、太尉、御史大夫、及び護軍都

關する記述は相國・丞相、太尉、御史大夫、及び護軍都

尉、司隸校尉の所に次のように見える。

相国・丞相、皆秦官、金印紫綬、掌丞天子助理万機。…有兩長史、秩千石。哀帝元寿二年、更名大司徒。武帝元狩五年、初置司直、秩比二千石、掌佐丞相舉不法。

太尉、秦官、金印紫綬、掌武事。武帝建元二年省。元狩四年、初置大司馬、以冠將軍之号。宣帝地節三年、置大司馬、不冠將軍、亦無印綬官屬。成帝綏和元年、初賜大司馬金印紫綬、置官屬、祿比丞相、去將軍。哀帝建平二年、復去大司馬印綬・官屬、冠將軍如故。元寿二年、復賜大司馬印綬、置官屬、去將軍、位在司徒上。有長史、秩千石。

御史大夫、秦官、位上卿、銀印青綬、掌副丞相。有兩丞、秩千石。…成帝綏和元年、更名大司空、金印紫綬、祿比丞相、置長史如中丞、官職如故。哀帝建平二年、復為御史大夫、元寿二年、復為大司空、御史中丞更名御史長史。

護軍都尉、秦官、武帝元狩四年、屬大司馬。成帝綏和元年、居大司馬府、比司直。哀帝元寿元年、更名司徒、平帝元始元年、更名護軍。

司隸校尉、周官、武帝征和四年初置。…元帝初元四年去節。成帝元延四年省。綏和二年、哀帝復置、但為司隸、冠進賢冠、屬大司空、比司直。

これらにより次のような通説的理解が得られる。漢初の丞相と副丞相たる御史大夫が政治全般の運営にあたり、常置されないものの太尉が軍事を担当してきたが、武帝代に

監察強化のため丞相府に司直が置かれ、また匈奴戦争で活躍した衛青・霍去病の処遇のために將軍の加官として元狩四年(前一九)大司馬を置いたが、属官と印綬は無かった。ただ護軍都尉が大司馬を補佐するものとして同時に設置された。また後に司隸として大司空に所属する司隸校尉も武帝代に置かれた。ところが霍光が大司馬大將軍領尚書事として実権を掌握してからは、大司馬は印綬・官屬が無いもののその地位は上昇した。そして成帝綏和元年に至り、丞相とともに大司馬・大司空が三公とされ、その印綬・官屬・俸祿が丞相と同等とされたのである。しかしこの三公制は哀帝即位後に廃止された。しかしまた哀帝元寿二年に至り、大司馬を最上位とする大司徒・大司空からなる三公制が確立し、それぞれの属官として司徒ないし護軍、司直、司隸が置かれた。

しかしこのような通説的理解だけでは三公制の形成を説明できない。前漢後期の内朝問題、尚書の強化、御史大夫府の機能の変化という政治史的・制度的側面も含めねばならない。既に述べたことであるが、前漢後期、御史大夫府の御史丞以下の御史の詔書起草の職務を事実上尚書が行うようになり、御史大夫の副丞相としての機能は大幅に低下していた。そして一方では宦官が掌握する中書があり、成帝代に外戚として権力を掌握した王氏にとって中書は具合

3 前漢末三公制の形成と新出漢簡（山 田）

の悪いものであった。成帝建始四年（前二九）の中書の廃止、尚書の強化という官制の改編はこれを前提とし、この時点で御史大夫府の御史は起革権を失ったものとみられる。一方御史中丞・侍御史は皇帝への直属関係を強化した。こうして、秦代以来丞相とともに行政を担ってきた御史大夫制を維持させる必要を失わせることにもなった。これを前提として以下において三公制の具体的考察を行う。

元帝代以来儒家的制度を実現しようとする動きは強まり、官僚制においても秦漢的伝統を改めようとする提案がなされるようになる。成帝代には理想的制度としての三公制理念が影響を強め、たとえば儒家官僚である何武は翟方進とともに王国の内史を廃止し、州刺史に代わって州牧を置くことを求め、また三公を置くよう建言している。そしてその建言が裁可され、成帝綏和元年四月に御史大夫を大司空と改名し、また当時大司馬票騎將軍であった王根を大司馬としてその將軍の官を罷めた。この間、

議者多以爲古今異制、漢自天子之号下至佐史、皆不同於古、而独改三公、職事難分明、無益於治乱。（朱博伝）

という反対論があり、それはかなり強いものであった。つまり、高祖以来の伝統に執着する官僚もまた多かったのである。その一人が後述の朱博であった。これは宣帝の

漢家自有制度、本以霸王道雜之、奈何純任德教、用周政乎。

（『漢書』卷九、元帝紀）

という精神とも合致する。元帝以降の儒教的政治理念実現の動向に対して、漢家伝統の政治体制・制度に固執する官僚もまだ多かったのである。

こうして丞相とともに置かれた大司馬と大司空は金印紫綬とされ、属官が置かれた。その次官は長史であり、丞相の二長史と同様官秩千石であった。ただ丞相府と同様の二長史ではなく、丞相の格の高さは維持されたと考えられることから、二府は一長史であったものと推測する。そして御史大夫に本来所属した御史中丞はすでに皇帝の直轄官化していたが、ここに事実上独立し、皇帝に直属することになった。また丞相には武帝元狩五年（前一一八）に司直が置かれ（官秩比二千石）、丞相を補佐して不法を察舉する任務を負っていたが、丞相府にあって半ば独立の地位を保っていた。このときの三公制においても大司馬・大司空についてこの司直と同様なものを設置することを考え、大司馬については武帝代以来の護軍都尉をその府に置き、丞相府の司直と同様なものとした。また大司空についても、武帝征和四年（前八九）に置かれた司隸校尉は、成帝元延四年（前九）省かれたが、それを復活し大司空に所属させて司直と同様な存在とした可能性がある。

またこの大司空という名称が採用されるについては、始

め司空としたが、県や道に獄司空があり、それと同じでは具合が悪いという議論があつて「大」を加えて大司空としたといふ⁽⁹⁾。これによれば、この時の改制は儒教的三公制の理念を強く承ける形で実現されながら、丞相という秦漢的伝統の最高官の名称を変えることには強い抵抗があり、その妥協の産物として丞相、司馬、司空という二文字の三公制が考えられた。しかしこのような議論があつて、司馬・司空に「大」を加えて、丞相、大司馬、大司空といういささか文字面で形が整わない三公制とせざるをえなかったのである。また百官表下によれば、何武が御史大夫から大司空となつたのは、「四月乙卯」(一二日)であり、大司馬票騎將軍王根が大司馬となつたのは「四月丁丑」(五月四日?)であり、同日ではない。あるいは外戚王氏の間でもこの大司馬制が外戚の権力取り上げにつながるのではないかという疑念があつたためであらうか。

しかしこのような三公制に対してはすぐにゆりもどしがきた。ちやうど王莽が念願の大司馬となつた直後の同二年(前七)三月丙戌(一八日)成帝が死亡したのである。そして元年(前八)二月に定陶王から皇太子に立てられていた欣が即位し、王莽も七月には大司馬の官から去つてゐる。哀帝は王氏の専権を憎んでおり、成帝代に実施された諸制度を次々と改めた。その一つとして、建平二年(前五)三

月に朱博の旧制を復活すべきだとした提案に従い、大司空を罷め、御史大夫を復活した。同時に大司馬についても印綬・属官を去り、將軍に冠すること以前の如くとした。従つてこの時点で御史大夫から独立していた御史中丞も以前と同様にその属官とされたであろうが、事實上皇帝の直属官化していた状況を変えることはできなかったはずであり、それ故所屬したとしても、もはや形式的なものとなつていたと考えられる。

しかし儒家官僚を中心とする三公制への要求は強く、成帝代の諸制度の改訂に性急であつた哀帝も、このような要求そのものを必ずしも否定するものではなかつたろう。元寿元年(前二)には正月の日食に際して賢良方正の士を推挙させ、彼等賢良方正の多くが就国している新都侯王莽を盛んに褒めそやし、その結果王莽はこの年に長安に帰ることができた⁽¹²⁾。こうしたことも儒家官僚の主張を強める要因となり、哀帝もその翌年元寿二年(前一)五月に再び三公制を復活したのである。これは百官表によれば「五月甲子」(二日)のことであつた。

しかしこの段階の三公制は成帝のときとは異なつて、はつきりと「丞相」という秦漢的伝統を断ち切り、儒家が主張するような「司徒」を採用し、ここに大司徒・大司馬・大司空という三公制が成立したのである。そしてこの

段階では、成帝代の三公制でも他の二官に比べて高い地位を保っていた丞相が、大司徒と改名されたことによって二官と形式的に全く同等なものとなり、それは結局、外戚などが就任することによって地位を上昇させてきた大司馬の地位を大司徒の上に置くことにもなった。『漢書』卷一一、哀帝紀で、

五月、正三公官分職。大司馬衛將軍董賢為大司馬、丞相孔光為大司徒、御史大夫彭宣為大司空、封長平侯。正司直、司隸、造司寇職、事未定。

と大司馬を最初に書いてあるのも、そのような三公相互の位置関係の反映であつたし、百官表上はそれを（大司馬）「位在司徒上」と表現しているのである。霍光以来の大司馬の実質的地位が、儒家的理念と合致する形で制度的に確立したのがこの段階であつたといふことができる。

同時に、成帝代と同様に三公府に長史（千石）以下の属官が置かれたが、大司徒もこの段階では長史一人とされたものと思われる。また成帝代同様に三公を監察面から補佐する役割をもった司直などの官を各府に置いた。いまや三公のトップに立った大司馬府には護軍都尉を改めた司寇を置き、大司徒府には従来どおり司直を、また大司空府には綏和二年（前七）に司隸校尉を司隸と改めていたが、それを属官として置いた。またこのとき御史中丞は御史長史と

改名され、侍御史とともに完全に独立し、事実上皇帝に直属した。ただ宮中にあつた御史大夫府からは切り離されたが、もともとその役所が宮中にあり、宮中の諸務を担当した少府との関係が新たに生ずることになったのである。これが後漢代に至つて光武帝が少府に「文属」⁽¹⁴⁾させた理由の一つであつたろう。

こうして儒家官僚の主張が全面的に採用された。哀帝もまたその即位当初は王氏専權を憎むあまり成帝代変更のものの多くを旧に復し、漢家の伝統の復活を主張した朱博の提案に従つたものの、儒教的「太平」実現にとつて儒教的制度制定が肝腎であるという儒家官僚の主張を容れる方に傾いていたのである。⁽¹⁵⁾

このように儒家官僚が圧倒的に優勢になってゆくなかで、漢家の伝統を強く主張した朱博は、亭長からスタートした武吏出身で、しかも法律全般に通じたわけでもない、まさに下級官吏からたたきあげて出世した人物であつた。彼は琅邪太守に赴任したとき、尊大な郡の有力属官たちに対して「存問し意を致」さず、彼らを全部罷めさせ、また門下掾で「耆老大儒、数百人に教授し、擗起舒遲」であつた者を太守府の属官にふさわしく「吏礼」を行うよう求めている。また「文学儒吏」の議論に対しては「（自分は）漢の吏であり、三尺の律令を奉じて」政治を行うだけだと答えて

れておく必要がある。また写真版によって何らかの関係のありそうな簡が発見される可能性はあるかもしれないが、現段階ではT1発見の簡にこれに直接関係しそうなものを見いだし得ない。

次は新出敦煌漢簡一一〇八であり、写真・釈文と馬圈湾についての詳細な報告がある甘肅省文物考古研究所『敦煌漢簡』上・下(一九九一年)による。

元始五年十二月、辛酉朔戊寅、大司徒晏、大司空・少薄豊下小府、大師、大保・票騎將軍、少傅・輕車將軍、步兵

□□宗伯、監御史、使主兵、主艸、主客、護酒都尉、中二千石、九卿、□□□□、州牧、関・二郡太守、諸侯相、関都尉

発見場所は馬圈湾のT13であり、ごみ捨て場であった。これは裏に「第六」と書いてあり、一綴りの文書の一部であったかと推測されるが、削られた様子も見え、ばらばらに廃棄されたものではなからうか。ただ文字を見ても正式の文書とするには乱れがあり、あるいは習字のために表、裏ともに書き写したものかもしれない。そのために綴じ紐部分の空白が見られないし、文字数も四一文字と多いのかもしれない。またT13からは二六枚の木簡が発見されているが、この簡のように背面に「第何」という形で書いてあるものではなく、さらに写真を見てもこの簡と関係がありそうなものはない。従って、現段階ではこの簡だけを

考察の対象とせざるをえない。

これらの検討のためには、元始年間の四輔・三公・將軍について見ておく必要がある。そのうち太傅は元寿二年に置かれたことが百官表に見える。⁽¹⁸⁾これは「古官」で高后時代に置かれたことがあるもので、それをこの年に復活したのである。これは哀帝死(六月)後、平帝が即位(九月)してから置かれたものと思われる。事実、百官表下によればこの九月に大司徒孔光が太傅となっている。そしてそれは「位在三公上」であった。太傅は形式的に大司馬王莽の上に位置することになる。しかしこれも王莽の手になるものであることは言うまでもなく、彼は扱いやすい人物として孔光をその地位に就けたのである。

そして元始元年(後一)に至ると、正月には太師・太傅・太保・少傅という四輔制度と安漢公賜号が詔書として下され、新たに太師・太保・少傅が置かれた。太師・太保はいずれも「古官」とされ、太師・太傅・太保の序列であったし、またいずれも金印紫綬であった。そして少傅は太子少傅としては初めてであった。このようにして今文学的大司馬などの三公制にやや遅れて、古文学的三公制を基礎とした四輔制が始まったのである。次に従来の文献から知られる元始年間の四輔・三公と將軍について表示しておく。⁽¹⁹⁾

	四 輔	三 公	將 軍
元始元年 (後一)	太師孔光、太傅王莽 太保王舜、少傅甄豐	大司馬王莽、大司 徒馬宮、大司空王 崇	車騎將軍王舜 左將軍甄豐 右將軍孫建
元始二年 (二)	同右	大司馬・大司徒は 同右 大司空王崇(三月 二日免)・甄豐 (四月一六日)	車騎將軍王舜 左將軍孫建(四月 一六日以降) 右將軍甄邯
元始三年 (三)	同右	同右	同右
元始四年 (四)	同右。四月二五日、王 莽「宰衡太傅大司馬印」 を与えられ、太傅・大 司馬印を辭退(王莽伝 上)。太傅は事実上無し。	同右。事実上大司 馬は無し。	同右
元始五年 (五)	同右。太師孔光四月死、 馬宮(大司徒兼任。八 月二〇日まで)。	同右。大司徒平晏 (二月一六日)	歩兵將軍王駿 強弩將軍孫建

これを前提としてa以下を考えねばならない。まずaは「八月辛丑」という干支から考えて元始元年八月一六日か、同二年八月二二日か、あるいは同四年八月三日であるが、元始四年八月段階では王莽が宰衡となっており、右のように太傅・大司馬印を辭退しているのであるから、下達文に「太傅大司馬」とあるはずがない。そしてこの簡には下達者として大司徒馬宮しか見えない。元年段階の大司空王

崇は、大司空になってから

歳余、崇復謝病乞骸骨、皆避王莽、莽遣就国。歳余、為傳婢所毒、薨、国除。(『漢書』卷七二、王吉伝附王崇伝)

とあるように、王莽にとってあまり具合のよくなかった人物であり、病氣をたびたび申し出ていたものと考えられる。そのため、大司徒・大司空が下達者となる前漢代の詔書下達の形式を大司空王崇の時期には採用しないこともあったのではなからうか。もし病氣で、あるいは何らかの理由で不在の場合は、『史記』卷六〇、三王世家のように御史大夫の場合でも「行御史大夫事」を置くことがあったのにそれがないからである。従ってこの詔書を元始元年八月のものと考える。ただその詔書の内容については残念ながら推測ができない。そして右の表により、大司徒は馬宮、安漢公太傅大司馬は王莽、太師は孔光、太保車騎將軍は王舜であることがわかる。なお四輔の序列では太師・太傅の順になるはずであるが、安漢公の地位の高さが太師の上に位置させたのである。またこの時の少府は宗伯鳳(百官表下)である。しかし「小府」が少府だとしても、安漢公の上に位置している点からみても、その示す内容は少府という官庁そのものではなく、前述の御史中丞―侍御史と同様、少府属官ではあるが皇帝直属の官としての性格を強めていた尚書を実際には指すものと考えたい。

そして車騎の下には当然「將軍」があつたはずであり、さらにその下には、大司空も含めて、「少傅左將軍(甄豐)・大司空(王崇)・右將軍(孫建)」と続いたはずである。ただ次に述べるように「將」までとしても、一行三六文字でやや字数が多いから、あるいは大司空は全く下達の対象に入っていないかもしれない。この点疑問のままとせざるをえない。Bの一番上は「合校」では「置」としているが、「軍」に読める。従つて、Aの一番下は「…右將」であつたものと考えられる。『居延漢簡釈文合校』がBの二番目の文字を「監」とし、五番目の左部分を「イ」としたのは卓見である。この部分も含めて従来不明であつたものがcによつて多くのことがわかるようになった。cには明確に「監御史」とあり、また「使主兵」などがあり、この部分は「軍、監御史、使主兵、中二千石、…」であつたと思われる。ここに州牧があるのは、哀帝の元寿二年(前一)に三公制と同様復活されて州牧が置かれていたからである。このように元始五年段階に見える王莽独特の官職が、既に元始元年段階から出現していたことが明確になる。

次にbは元始三年六月二日に大司徒と大司空から下されたもので、王莽はまだ「三公言事、称『敢言之』」(『漢書』卷九九上、王莽伝上)というように隔絶した地位であつた幸衡には至っていないのであるから、下達の対象のなか

に含められていた可能性が高い。それを前提とすれば、この詔書の文は

元始三年六月乙巳朔丙寅、大司徒(馬)・宮・大司空少傅(甄豐下(「小府」?)・安漢公太傅大司馬(王莽)・太師(孔光)・太保(三四文字ないし三六文字)

車騎將軍(王舜)・左將軍(孫建)・右將軍(甄邯)・主兵・中二千石・州牧・郡太守・諸侯相・承書從事・下当用者、…(三三文字余)

と復元されよう。ただこれもaの場合と同様文字数の面などで問題もあり、一つの仮説として提示するものである。そして四輔の一つ少傅でもあつた甄豐が大司空として職務を遂行するときは「少傅大司空」ではなく、「大司空少傅」という肩書きを用いたことを知ることができる。詔書の内容は不明であるが、王莽はこの三年夏に次々と儒教的諸制度を実現していたが、あるいはその一つに関係するものであつたろうか。

さらにcは大司徒平晏・大司空少傅甄豐が下した元始五年(二)一月一八日の詔書である。このとき太師は不在であつたが、その役所はそのまま維持されていたのであろう。また太保王舜が車騎將軍であつたが、この一二月段階では票騎將軍となつてゐることがわかる。このような將軍制度の改革は、王莽が九錫を与えられた五月二七日以後閏五月に

かけて行われたものと推測する。⁽²⁴⁾ 輕車將軍は元始二年以降右將軍であつた甄邯である。翌居攝元年の十二月に「太保・大司空・豐・輕車將軍・步兵將軍」(王莽傳上)と見えるように、彼は「輕車將軍」と明記されており、この簡によつてそれが少なくとも元始五年十二月に遡るものであること、そして五月以降の將軍制改革を考慮に入れると、彼が右將軍から輕車將軍に移つたのはやはりその時期であつたとしなければならない。しかしここに「少傅」とあることと、「大司空」の下に「少傅」とあることは問題である。この「少傅」は写真を見ても「少傅」と読んで問題がないように思われる。そうだとすればこの時期に少傅が二人存在したことにならう。この間の事情を王莽傳上から探るならば、この平帝死亡後、孺子嬰擁立を決定した非常事態に対応して、太師に適當な人物を得られないなか、四輔を強化する必要があつたために王莽の信頼の厚い甄邯を甄豐とともに少傅に任命したと考えることができる。

步兵將軍は元始五年の將軍制改革以降王駿であつたが、右の王莽傳上の記事によつて同時期に左將軍から強弩將軍となつていた孫建が少なくともこの一二月には王駿に代つて歩兵將軍となつていたものと推測できる。このように前掲した表について、元始五年の將軍の部分に、多くの新事実を付え加えることができるのである。さらにこれによつ

て二行目の冒頭二文字は「將軍」であることがわかる。その下の「宗伯」は宗正を元始四年改めたものである(百官表)。元始四年、京師を前輝光・後承烈の二郡に分け、「公卿」以下の官名を変更した官制改革の一環であつた。平帝紀の元始五年の詔(正月?)に、

郡國置宗師以糾之、致教訓焉。二千石選有德義者以為宗師。考察不從教令、有冤失職者、宗師得因郵亭書言宗伯、請以聞。常以歲正月賜宗師帛各十匹。

とあるが、これは王莽が宗室重視の姿勢を示すことによつて、「十有餘萬人」(同詔)に達していた宗室の歡心を買うとともに、郡國に置いた宗師によつて事実上宗室に対する監視をも強めたものである。そして宗伯の地位も、將軍の下、監御史の上に位置していることからわかるように高いものになった。なお百官表下によれば、元始五年の条に「太常劉岑為宗伯」とあり、この一二月の時点でも彼が宗伯であつた可能性がある。

次の「監御史」は、既に元始元年八月の詔書に見えており、王莽が実権を掌握して以来、御史長史—侍御史のラインによつて監察を強化したが、地方では御史長史のラインにあつた刺史ではなく、地位の高い州牧が置かれていたため、州牧以下を監察する必要が生じていた。そのために監御史を地方に派遣したものと考えられる。このように、州

牧制採用に伴う地方監察の問題を監御史の派遣という形で解決したのである。

次の「使主兵、主帥、主客、護酒都尉」の四つは從來全く見られなかったものであり、元始元年段階で既に「使主兵」が登場していたが、これは様々な官職名で中央から派遣され、使者としての印である節を有し、軍事を担当していたものを指すと考ええる。平帝紀元始二年九月に

使謁者・大司馬掾四十四人持節行迎兵。

とあるのがその一例である。また四年二月から三月にかけてと推測されるが、太僕王憚・大司徒司直陳崇ら八人が「分行天下、覽觀風俗」の使者として派遣されている。これらもまた「使主某」に該当すると考えられる。つまり元始年間に入ってからには、詔書下達の形式の上で、大臣クラスである中二千石の地位を下げ、將軍に次ぐものとして皇帝の使者となった者を置いたことを知ることができよう。

その次の「主帥」「主客」も同様であり、使者としてこれらの事柄を担当したのであろう。そして「主帥」は節を有して地方の穀物を担当したものとみられる。もしそうであれば、それは国家財政のみならず全国の農業の担当者でもあった大司農の権限を侵食することになったであろう。

また「主客」は匈奴を始めとする対外関係において、外交使節として外国に赴いたり、また匈奴單于などの外国の君

主などを送迎する役割を帯びたものを指すものと考えられる。

しかしその次の「護酒都尉」はよくわからない。王莽の政治姿勢から考えれば、元始元年には太后が湯沐邑一〇県を大司農に所属させてその租税収入を別会計とし、貧民に支給させ、また元始二年には王莽が率先して錢百万、田三〇頃を献上して、多くの官僚もそれに倣っており、食料となる穀物をつぶすことになる酒の醸造販売について一定の規制を意図し、その実現のためにこのような特別の官職を元始四年に置いたものと推測したい。しかもこれもまた基本的に使者としての性格をもち、節を有していたのであろう。

このように、元始年間の王莽政権においては王莽が直接派遣する者の地位が高くなっていたが、それは彼が権力を集中してゆく上で重要な役割を占めるべく重用したからであると思われる。つまり、中央官の権限をこうした使者の重用によって牽制し、絶えずその行政を全国的にチェックすることで王莽の意向に従うことを余儀なくさせていたのである。

また「関・二郡太守、諸侯相、関都尉」については、一番最初の文字がよくわからないのでそのままとしておく。もし「関」でよいとすれば、特別に函谷関については都尉

ではなく太守としたものであろうか。この点は今後の検討に待つ。そして「二郡太守」は前述の元始四年に京師を二部に分割して新設された郡である。⁽²⁷⁾ただその次に「諸侯相、関都尉」とあって、一般の「郡太守」がないことは問題であるが、「二郡太守」の所に「太守」とあるので省略したものであろうか。本来の詔書の原文にはあつたはずである。この簡が前述のように整理をして書き写したり、あるいは練習簡であつたとすればその可能性は高くなるし、ミスの場合も十分考えられる。

またこの詔書の内容については、元始五年二月一八日という日付から次の二つの場合が考えられる。前漢代皇帝死亡直後の大赦令の事例は高祖死亡の場合に見られるが、この事例を除いては新皇帝が即位後に大赦令を下す場合が多い。本紀・王莽伝いずれもが、平帝の死亡（十一月一六日⁽²⁸⁾）直後に大赦令を下したことを伝えており、多数の中央・地方の官職を列挙するこの詔書は、その大赦令そのものである可能性もある。これが一つである。また王莽伝上の記述によれば、この平帝死亡後にすぐに次に立てるべき人物の選定に入つて二歳の広戚侯子嬰を選んだ。さらに一二月には「告安漢公莽為皇帝」という符命が現れ、王莽はそれを太后に上奏させたが、太后は退けた。しかし結局安漢公王莽に漢王朝の政治をとらせるべく「居摂」を称し、祭祀

においては即ち神々に対しては「假皇帝」を称し、民臣は王莽を「摂皇帝」と称することにし、明年居摂と改元することを明示した詔書を下したのである。二月一八日に下されたこの詔書は、時期的にみてこの居摂を天下に宣言した詔書である可能性もある。後者の可能性がより高いのではないかと考えるが決め手はない。またこれ以外の詔書かもしれないが、いずれにせよ後考に俟つしかない。

結

以上のように、三公制の形成過程と王莽政権成立とは密接に関係した。ただに三つの公位にある最高官を実現するだけでなく、漢王朝の伝統を切断した三公制を実現したとき、儒家官僚の上に立つた王莽は有利な立場を得た。しかも元寿二年六月二六日哀帝が死亡し、王太后だけが残されていたという幸運が重なつて大司馬領尚書事となり、ほぼ九月一日の平帝即位後には強固な基盤を築き、その直後から新たな政治方式を実現していったものとみられ、その最も重要なものが古文学的三公制を基礎とした四輔制であつたし、漢王朝の守護者としての肩書きである安漢公であつた。この段階で秦漢的伝統の王・侯制とは別な原理に立つ周制的「公」が出現したのである。同時に直接派遣した使者に皇帝直屬官としての強大な権限を与えることによって、

事實上王莽の独裁体制を実現する方式をもあみだした。

このように元始年間の四輔制・宗伯などの官制改革は、王莽政権確立にとって必要不可欠なものとして実現されていったのであり、王莽の制度いじりの傾向だけを強調するのではなく、それが実際に果たした役割を冷静に見つめる必要があるのである。

注

(1) 周道濟「漢唐宰相制度」(修訂版)一九七八年、安作璋・熊鉄基「秦漢官制史稿」上(一九八四年)など。これらには丞相・三公などの属官についても言及がある。

(2) 伊藤徳男「前漢の三公について」(『歴史』八、一九五四年)では、綏和元年以前三公が無かったにもかかわらず、「三公」が史・漢に見えることについての考察を行い、以下のように述べる。前漢代においては職掌と身分いずれの面からみても三公に該当しうるのは丞相しかおらず、皇帝の政務全般を輔翼する点からは御史大夫が該当し、身分すなわち地位の面からは太尉が該当する。綏和元年以前の三公は「全般的に天子を輔翼すべきものという思想」に基づいた三公本来の意義に由来したものであり、ここから丞相と御史大夫について「三公」と表現することが行われ(丞相については秦代から)、はっきりとはしないが昭帝以後に大司馬將軍領尚書事をも「三公」とするようになった。

また堀池信夫氏は「漢魏思想史研究」(一九八八年)の第一章「前漢期の思想」四「周礼」の一考察で三公問題の思想史

的側面に触れ、次のように述べる。「三公」という言葉自体は「荀子」に見え、「呂氏春秋」では「三公九卿」と拡大し、「淮南子」にもそれが継承される。また馬王堆帛書「経法」にも「三公」「三卿」があり、「礼記」王制では「三公九卿二十七大夫八十一元士」となるがまだ王制の段階では数理的世界観は強固ではなかった。しかし董仲舒段階に至ると、「春秋繁露」に見られるように「三」という数字は論理の骨格として確立されるまでに至っている。しかし具体的な三公の名称はまだ定かではない。「漢書」百官表上で述べられる三公は、太師・太傅・太保という古文説に基づくものと、「或説」としてあげられた司馬・司徒・司空という今文説に基づくものがあり、この後者の三公説は今文説であるとはいっても、それは前漢末期に劉歆が「周礼」を表章した際に抱いていた三公のイメージでもあり、前漢末の最も有力な三公説でもあったとする。

なお木村秀海「西周官制の基本構造」(『史学雑誌』九四—一九八五年)は、大史寮・公族寮・卿事寮のうち、卿事寮の事大夫であった正嗣土・正嗣馬・正嗣工が次第に重要性を増し、春秋時代にはそれまで重要であった大師・大史(内史尹)などの地位が低下したのに対し、行政実務を有した司徒・司馬・司空の地位が上昇することを指摘する。また西周の制度が戦国時代を通じて思弁的にはあるが拡大整備されて「周礼」としてまとめられたという考えに立つ伊藤道治氏は(『中国古代国家の支配構造』一九八七年)、三事大夫―参有嗣(嗣土・嗣馬・嗣工)が「周礼」の司徒・司馬・司空に定着していったとする。

これらを参考にすれば、西周以来とりわけ春秋時代の司徒などの三公の重要性が増すとともに、王・侯を輔佐するものとしての三公思想が戦国時代には形成され、具体的官職名でも、司

徒・司馬・司空という三官をそれに当てる考え方がかなりあったものとみられる。堀池氏が官名が具体的ではないとするものの、『尚書』牧誓の「御事司徒・司馬・司空」があり、王制でも確かに大師・冢宰・大司寇・大樂正などがあつたが、大司徒・大司馬・大司空を「百官」の上に立つ「三官」ともしており、混乱はあるもののこの三官を三公として解釈しうる余地はある。また中央・地方の司空は秦代以来存在し（秦では邦司空と県司空。漢では中央の都司空などあり、これについては拙稿 *Offices and Officials of Works, Markets and Lands in the Ch'in Dynasty, ACTA ASIATICA 58, 1990.* 及び「前漢武帝代の財政機構改革」『東北大学東洋史論集』一、一九八四年参照）司徒についても『史記』卷二「漢興以来将相名臣年表の景帝元年（前一五六）の所に倒書されて「置司徒官」とあり、「罷」などのその廃止についての記載もなく、他に全く見えないものであるが、呂后元年（前一八七）の「孝弟力田二千石」官（『漢書』卷三「高后紀」と同様に一時的にせよ漢初に置かれた官であつた可能性がある。このように司馬だけでなく、司空・司徒という名称自体は漢代の官僚機構のなかに存在していたのである。

班固は『漢書』食貨志上で「周礼」や均の理念を背景として彼独自の理想的周制を提示したが（拙稿「均の理念の展開——王莽から鄭玄へ——」『東北大学教養部紀要』四三、一九八五年）、その彼にふさわしく百官表上では古文学的三公の理解を示した上で、現王朝たる後漢の三公制とも近い前漢以来の伝統のある今文学的三公制をも「或説」としてあげたのであろう。そしてそれは堀池氏の言うように決して「周礼」的古文学的理解と離れるものではなかった。

(3) ここは「置長史如丞。中丞、官職如故。」か「置長史如丞相。中丞……」とあるべきものであろう。

(4) 拙稿「前漢謁者・中書・尚書考」〔『集刊東洋学』六五、一九九一年〕。

(5) 『漢書』卷八三、朱博伝に次のように見える。「初、漢興發秦官、置丞相・御史大夫・太尉。至武帝罷太尉、始置大司馬、以冠將軍之号、非有印綬官屬也。及成帝時、何武為九卿、建言「(古) 備三公官、各有分職。……(今) 政事煩多、宰相之材、不能及古、而丞相独兼三公之事、所以久廢而不治也。宜建三公官、定卿大夫之任、分職授政、以考功効。」朱博為大司空、奏言「……高皇帝以聖德受命、建立鴻業、置御史大夫、位次丞相、典正法度、以職相參、總領百官、上下相監臨、歷載二百年、天下安寧。……故事、選郡國守相高第為中二千石、選中二千石為御史大夫、任職者為丞相、位次有序、所以尊聖德、重國相也。……臣愚以為大司空官可罷、復置御史大夫、遵奉旧制。……」哀帝從之。……後四歲、哀帝遂改丞相為大司徒、復置大司空・大司馬焉。」また同卷八六、何武伝。

(6) ただし「漢旧儀」では二千石とする。この点、三公制時代の司直は他の護軍・司隸とともに二千石であつた可能性がある。

(7) 『漢書』卷一〇、成帝紀にも「二月罷司隸校尉官」とある。司隸校尉が省かれたことは、各州の監察に州刺史を、三輔・三河・弘農監察に司隸校尉をという監察体制に変更を生じさせたはずである。中央部分の監察には御史中丞の下侍御史及び司直などの既存の監察官が当たつたのであろうが、侍御史が直接派遣されることが多くなつたのであろう。後述の元始年間の監御史派遣の一つの制度的前提となつた可能性がある。

(8) たゞこの間の事情については、百官表では「綏和二年、哀帝復置、但為司隸、冠進賢冠、屬大司空、比司直。」とあり、

「漢書」卷七二、鮑宣伝には、「時哀帝改司隸校尉、但為司隸、官比司直」(なお司隸とされた段階でも鮑宣伝の記述によれば大司空府とは別の独立した「司隸官」の役所にいた。また前漢末の司隸校尉の役所は故武帝廟に置かれていた)とあつて、確かに成帝ではなく、哀帝がこの年に司隸を置いたかのようである。たゞ哀帝が司隸という官を置いたとしても、すでに成帝段階で三公制実施に伴い、丞相司直、大司馬護軍都尉と同様なものをも大司空にも設けることを考えなかつたとは思われない。一つの可能性としてこの三公制実施段階、ほぼ大司馬護軍都尉が設置された頃に大司空に司隸校尉が置かれ、それを司隸と改名したのが哀帝であつたという仮説を提出しておきたい。その方が成帝の政治を改めようとし、前漢二百年の伝統に従うべきだという朱博の提案に従つた哀帝にふさわしい。もしそうだとすれば百官表上の記述は本来「綏和元年、復置、屬大司空、比司直。哀帝綏和二年、但為司隸、冠進賢冠。」とあるべきものであつたことになる。その場合は、鮑宣伝の文も、前半の司隸校尉の改名が哀帝によるものであり、後半の「官比司直」は以前からのことになる。

(9) 「統漢書」百官志一注引応劭漢官儀「綏和元年、罷御史大夫官、法周制、初置司空。議者又以卑道官獄司空、故覆加大、為大司空。」また「通典」二〇、司空。

(10) 前漢武帝以後後漢前期までの曆譜については、居延漢簡などをもとにして従来ものを訂正した陳久金「敦煌、居延漢簡中の曆譜」(『中國古代天文文物論集』一九八九年)が信頼できる。なお「丁丑」は五月四日である。「丁巳」ならば四月一四日と

なる。本紀・朱博伝は大司馬任命を大司空任命の上に行っている問題がある。

(11) 「資治通鑑」卷三三參照。

(12) 「漢書」卷九十九、王莽伝上「在國三歲、更上書冤訟莽者以百數。元寿元年、日食、賢良周諫・宋崇等對策、深頌莽功德、上於是徵莽。」

(13) 百官表では元寿元年に司寇と改名したといい、食違いがあるが、前引哀帝紀の「正司直・司隸、造司寇職、事未定」という記事から考えても、やはり元寿二年五月段階での設置であらう。「事未定」とは、この直後の六月に哀帝が死亡し、完全実施までに至らなかつたことを指し、ほぼこの二年には司寇が置かれたものと考ええる。

(14) 拙稿「後漢の大司農と少府」(『史流』一八、一九七七年)參照。なお前漢代宮中に官署があつた官については前掲拙稿「前漢謁者・中書・尚書考」參照。

(15) 「漢書」卷九三、佞幸伝・董賢伝に「(哀帝)曰、吾欲法堯舜、何如。」とあるように、当時儒家の間で見られるようになった「禪讓」を哀帝が持ち出している。哀帝もそのような思想に強く影響されたことがわかり、儒家優勢の当時にあつて儒教的制度の実現を当然とするようになっていたのである。前引朱博伝で「後四歲、哀帝遂改丞相為大司徒」と述べる「漢書」の文は、儒教的制度を「遂に」実現したし、それは当然であるというニュアンスが見られるものである。

(16) 門下は長官の礼遇を受ける幕府官的存在となりつつあつた(佐原康夫「漢代の官衙と属吏について」『東方學報』六一、一九八九年參照)。

(17) なお右に「」で示したのは謝桂華等「居延漢簡釈文合校」

(一九八七年)の釈文である。

(18) 百官表上「太傅、古官、高后元年初置、金印紫綬。後省、八年復置。後省、哀帝元寿二年復置。位在三公上。太師・太保、皆古官、平帝元始元年皆初置、金印紫綬。太師位在太傅上、太保次太傅。」

(19) 「正月」については、王莽伝上と百官表下に食い違いがある。王莽の上書中に「正月丙辰」とあるが、朔が己未である正月には丙辰はない。一方百官表では「二月丙辰」としている。その場合は己丑朔であるから二八日になる。しかし王莽伝では、この四輔制度制定の詔の後に太后が王莽を太傅・安漢公とした正式な詔書があり、その後各種の恩恵に関する詔書が下されており、平帝紀の正月中にこれらを下したという記述と一致する。確かに四輔制度制定の太后の詔には王莽を太傅とすることは見えないのであり、この順序で詔は下されたと考える以外にない。そうであれば、この「丙辰」という干支に誤りがあるものとみるべきであろう。

(20) 注(2) 参照。

(21) 王莽が宰衡となった元始四年四月二五日以降おそらくは秋には、多くの官名を改めたようであり(後述)、饒宗頤氏は「新莽職官考」(『選堂集林』史林)上、一九八二年)において、元始四年以降左右將軍は見られなくなり、一方五年以降には歩兵・強弩・輕車將軍が見られる。これはこの元始四年の官制改革に関係し、左右將軍を廃止して置いたものであろうかとする。これは卓見である。しかし平帝紀の官制改革のなかに將軍は見えない。百官表下では元始五年に「執金吾王駿為歩兵將軍」とあり、『漢書』卷一八、外戚恩沢侯表では成武侯孫建が五年閏月(五月の後)丁酉(四日)に「以強弩將軍有折衝之威(侯)」と

あるように、強弩將軍であったことがわかる。この封建は孫建が強弩將軍となつてからの功績によつて行われたものでなく、王莽が政權を掌握して以来「爪牙」(王莽伝上)として活躍してきた功績に対してのものであろう。従つて、これよりかなり早い時点で強弩將軍となつていたとはいえない。少なくとも閏五月四日にはそうであつたという以上はいえない。このように將軍制の改革は元始五年段階ではないかと考える。具体的には、王莽が九錫を与えられた五月二十七日以後、制度制定者としての權威を示すべく行われた改革の一環であつたと推測する。元始四年の官制改革の状況がもう一つ不明なので、現段階ではこのように考えたい。

(22) この州牧制をめぐっても、儒家的「古制」復活の主張をした何武などとは対照的に、朱博は厳しい批判を加えている。朱博伝での彼の主張は、「漢には部刺史による郡國の監察という伝統があり、刺史として九年勤務すれば、太守・國相になることができた。(それだけに監察に専念できた)ところが州牧制が布かれると、官秩が真二千石で位が九卿に次ぐことになり、成績によつて九卿となることができるために、あえて姦軌を禁じないで、ことなかれ主義になつていく。刺史を復活すべきだ。」というものである。これは州牧制の弊害の適切な指摘であつた。(23) この前後の干支には問題がある。まず八月の馬宮免官の後、百官表によれば「十二月丙午、長樂少府平晏為大司徒」とあり、十二月に平晏が大司徒になつたことになるが、十二月朔は「辛酉」であり、十二月に「丙午」はない。また平帝は本紀によれば「十二月丙午」に死亡した。王莽伝でも「十二月平帝崩」とある。もし十一月とすれば朔は「辛卯」であるから「丙午」は一六日にあたる。この元始五年は閏月が五月の後にあり、正

月から数えればこの十一月は第「十二」番目に該当し、あるいはそれから生じた誤りであるかもしれない。しかし本紀・百官表・王莽伝のいずれもが一致して「十二月」とするのであるから、このような単純な誤りとはできない。もし王莽が即位後自らに関わる「年代記」を編纂したとき、始建國元年以降に用いられていた殷正で、夏正を使用していた時期のものまで遡って改めたと考えると、つまり王莽が暦を追改したとすれば、この元始五年十一月は、ちょうど殷正十二月に該当することになり、この三者が一致して「十二月」とすることは別に問題がないことになる。このように考えてさしつかえないとすれば、少なくとも元始年間から居摂年間に至る『漢書』の月日については、そのような追改されたものがそのままの夏正に戻されずに残っていることも考えねばならないことになろう。

(24) 注(21) 参照。

(25) 平帝紀元始四年「分京師置前輝光・後丞烈二郡。更公卿・大夫・八十一元士官名位次及十二州名。分界郡国所屬、罷置改易、天下多事、吏不能紀。」

(26) 注(22) 参照。

(27) 百官表下では元始五年の所にも京兆尹・右扶風・左馮翊の三輔任命者が見られ、また劉歆は始建國元年正月段階まで京兆尹であった(王莽伝中)。従来の三輔とこの新設された二官との関係がもうひとつ明らかでない。「前」「後」という名称からみて、従来の三輔を大きく南と北に分けてそれぞれの管轄範圍の行政を監督させたものか、あるいは長安を中心とした部分を三輔から切り離して南北に分割したものであろうか(『資治通鑑』卷三六の胡三省注はこの立場)。前者の場合は「二郡」とあるように、監察ではなく、行政に関わる官であるとみられる点から問

題がある。後者の場合は、長安周辺を六郷とし、三輔を六尉とする天鳳元年(二四)の改革の基盤が既にこの段階でできていたことになる。

(28) 注(23) 参照。

(補注)「小府」についての補足。下達対象のトップに「小府」が位置する最も早い例は、新居延漢簡E・P・T 53・66である。これは、御史大夫于定国が「行丞相事」として、宣帝甘露三年(前五二)正月一七日に「小府・中二千石」以下に下達したものである。この宣帝代、中書の宦官を重用し、尚書についても皇帝は直接掌握を進めていた。このような、本来は少府属官であるものの権限強化が、下達の形式にも影響を及ぼし、中二千石の上に「小府」を置いたものと推測する。これは少府の地位向上の結果ではなく、その属官であるものが皇帝の直轄官化したことの結果なのである。なおこの簡の裏面には練習の文字がある。